「オルランドさんのごしんせつはありがたいが、おたがいの仕えている君は、貧の聖女だということをわすれてはいけない。」といいきかせました。そのかわり、オルランドにたのんで、お弟子たちのこやのほかに、もうひとつ、ちかくのぶなの木の下に、やっとからだがはいるだけの、ほったてごやをたててもらいました。聖人は、ここで自分ひとりだけになって、心ぶかいおいのりにはいりました。おいのりは、いく日もいく晩もつづきました。そのあいだ聖人は、なにもたべずなにものまずで、レオネのもってきたひとかけのパンと水はいつもそのまま、そこにありました。それでも聖人のこころは、神様のふしぎなお示しでいっぱいになっていました。からだは天國のまぼろしに醉ったようになっていました。レオネたちが、とおくからそっとみていますと、聖人のたましいに神様がはいって、いのりながら聖人のからだは、地をはなれて、三尺、五尺と、ときには、ぶなの木のこずえにまでもたかくうち上げられました。

やがて、聖母昇天のお祭が來ました。聖人は、もっとふかい山陰のさびしい所をさがして、そこのちいさないおりにこもって、ミカエル天使のお精進にはげみました。そこへはけわしい岩のさけめのあいだにかけた、あぶない丸木橋をわたって行かなければなりませんでした。日にいちど、レオネが、わずかのパンと水をもってその橋をわたることをゆるされ

ました。それと、夜いちど、橋のところまで來て、

「主よ、われに、くちびるをひらかしめたまえ。」というのです。それで、聖人が、「主はゆるしたまえり。」とこたえたときだけ、もういちど橋をわたって行って、聖人とともども、あかつきのおいのりをとなえることができました。

ただひとりしている精進とおいのりのあいだに、れいの悪魔はまたしつっこくあらわれて、聖人のからだを責めさいなみました。荒あらしく聖人をつかんで、岩からなげとばし、つきおとしました。聖人がやっと、岩にしがみつくと、その岩の上には、まるで、やわらかなろう型の上におしつけたように、聖人の顔と手のかたちが、おされて、そのままつきました。

いじわるい悪魔とたたかいながら、あくまでおつとめをおこたらない聖人をなぐさめるために、神様は、ときどきお使をおよこしになりました。この山陰のいおりちかく、一羽のたかが巣くっていましたが、それがいつも、あけ方、おいのりで疲れている聖人のあたまの上に來て、つよい、いさましい羽ばたきて、聖人のげんきを引き立てました。

ながい斷食でからだのよわっているうえ、毎夜のようにおそってくる悪魔とのたたかいで、さすがの聖人もしかし、疲れきっていました。聖人はからだのたのしみのかわりに、たま

しいのたのしみを、神様にねがいました。すると、ある夜、くら闇のなかに、光りかがやきながら、ひとりの天使が、ヴィオラと一張の弓を、手にもってあらわれました。

聖人は、おどろいて目を見はりました。天使は、弓を樂器にあてました。もうただいちどひいただけで、いいようもなくあまいヴィオラのメロディーが、聖人のたましいのそこにまでじいんとしみわたりました。聖人のからだもたましいも、羽根のように輕くなりました。

「あの弓でもういちどひかれたら、わたしはたましいを空にとばしてしまったであろう。」

と、聖人はのちに兄弟たちに話しました。

主キリストの傷あと

春から秋に季節がうつって、九月の聖十字架祭が近くなりました。ある夜、れいのとおり、兄弟のレオネは、聖人とあかつきのおいのりをしに、丸木橋の所まで行きました。そして、いつものとおり、「主よ、われに、くちびるをひらかせたまえ。」といいました。聖人の答はありません。三どくりかえしてよびましたが、こだまだけがかえって來ました。そこで、しんぱいになって、そっと橋をわたりました。どこか林の中でおいのり

をしていられるのだろうとおもって、お月さまの光をたよりに、藪の中を分けて行きました。だんだんふかくはいって行くうち、やっと、木ぶかい奥で、かすかなおいのりの聲がしました。レオネは、ほっと安心して、足音をしのばせて、そばに近よりました。

月あかりにすかしてみると、聖人は、林のそとのたいらな所に出て、顔を空にむけて、手をあわせながら、ねっしんにいのっていました。

「ああこの上なく、おやさしい神様、あなたはどなたでいらっしゃるのでしょうか。そして、このわたくしは、地の上のこの上なくいやしい、なんのおやくにも立たないこの虫けらのわたくしは、いったいなにでございましょうか。」

聖人は、くりかえしくりかえし、これだけのことばをとなえるだけでした。

レオネは、ふしぎにおもって、ふと目をあげて見ますと、大空からひとつ、ほのおがつくしくかがやきだしました。そして、それは下へ下へとおりてきて、聖人のあたまの上でとまりました。ほのおからやがて聲が出て、なにごとか語りだしました。聖人は、ほのおと話しながら、三ど、手をそのほうへさしのべました。ほのおは、やがて、空にかえって行きました。

レオネは、目のあたりみた大きなふしぎがこわくなりました。それでそっと足音をぬす

んでかえりかけました。でもがさこそいう落葉の音で、聖人はさとってよびとめました。

レオネは、聖人の前にひざまづいて、ないしょではいって來たおゆるしを求めました。聖人はレオネのすなおな心をかわいそうにおもって、「そっと來てのぞくようなことは、こののちもうしないがよい。」と、いっただけでした。そして、さっき、ふしぎなほのおの中に、神様のけだかいお姿をみたことと、聖人みずからのあわれにみにくい姿をみたことを話しました。そして、そのとき神様は聖人に、三つのささげものというのは、神にちかいすなおさです。けだかいほどの貧しさです。そして、光りかがやくあわれみの心です。

そのあと、聖人は、レオネに、聖書の福音書をもってくるようにめいじました。それをレオネの手にもたせたまま、聖人はあついおいのりを神にささげました。そして、レオネの手で、三ど、聖書をひらかせました。三どとも出て來たのは、キリストが十字架の上で苦しまれた物語のあるところでした。

なぜ、三ど聖書の福音書をひらかせたのでしょう。神様が、これから聖人の身をかりてあらわそうとされるふしぎが、どんなものであるか、あらかじめそれを聖書のしるしでし

ろうとしたのです。そこで、聖人は、近く天國に召される前、自分のからだにひとつの奇蹟があらわれるが、それは主キリストが、昔、十字架の上でお受けになった苦難とおなじものであることをさとって、いよいよ神様の大きなおめぐみが、胸いっぱいあふれるようにおもいました。

さて、聖十字架祭の前夜になりました。聖人が、いつものように、いおりにひとりこもって、いのっていますと、天使は、神様のおことばをつたえて、いよいよ奇蹟のあらわれる日の來たことを告げました。聖人は、主のおぼしめしにしたがって、どんな苦しいこともしのびますとこたえました。

九月十四日、お祭のその日になりました。夜あけ前、聖人は、いおりのそとに出て、東のほうをむいていのりました。

「おお主イエズス　キリストさま、やがて死にますわたくしに、ふたつのおめぐみをおあたえください。そのひとつは、このわたくしのたましいとからだに、主のお受けになったとおり、あのおいたわしい十字架の苦しみをそのままかんじられますように。もうひとつは、あなたのお胸をもえたたせ、わたくしども罪びとのすべてに代って、あれほどの苦難をこらえてくださった、けだかいつよい愛のこころを、わたくしにも分けていただけます

ように、これがわたくしのせつないお願でございます。」

こうして、はてしなくながいおいのりをつづけるうち、聖人の願が、たしかに神様につうじたことがわかりました。

聖人のたましいは火のようにもえたちました。聖人の顔かたちが、だんだん、キリストにちかくなりました。

朝のきよらかな光の中に、天からくだった光の大天使セラフが、六つのつばさをつけてあらわれました。ふたつのつばさは、あたまの上で、天にむかっていました。ふたつのつばさは、肩で羽ばたくためにひろげられました。ふたつのつばさは、からだをつつんでいました。六つのつばさは、どれももえるようにかがやききらめいていました。

天使はみるみる、すみやかな羽ばたきで下って來て、聖人とすぐむかいあうまで近くによったので、そこに、十字架につけられた人のかたちが、はっきりとみられました。聖人は、これをみて、いたましく、おそれつつしみながら、いいようのないよろこびに心がおどりました。

このとき、ラヴェルニアの山は、もえ立つようなかがやくほのおにつつまれました。お日さまがまだのぼらないのに、山山、谷だには、ひるのようにあかるくなりました。ちか

くにいた夜番の羊かいたちは、このあやしい光が、いつまでもきえないのをみてあやしみあいました。林ではろば追いが、日が出たとおもって、あわててろばに荷をしょわせて出ると、ふと光がきえたので、おどろいているうち、こんどはほんとうに、朝のお日さまがかがやきだしました。

セラフ天使のまぼろしの中で、主キリストは聖人と話しました。なにをその話でしたか、聖人はたれにも語らずにしまいました。それよりももっとかんどうぶかいことばを、主は聖人のからだの上に、つよく、あつく、焼きつけました。主キリストが十字架の上でうけた両手両足と脇腹(わきはら)の傷はそのとおりに、聖人の両手両足と脇腹にのこって、そこからは血さえしたたりながれました。セラフ天使にあらわれた十字架のイエズスのいたましいまぼろしが、そっくりそのままに、フランシス聖人の肉のからだに、釘(くぎ)で打ちこまれ、槍でつかれた傷になってのこったのでございます。

主キリストの傷あとを、からだにうけたことを、聖人はおおくのものに知られまいとしました。でもながれてやまない血と、傷のはげしい痛みで、聖人はひとりで立つことも、あるくこともできなくなりました。

レオネはじめ兄弟たちは、聖人をかかえ出し傷の手當をしたのち、オルランド伯爵からお

くられれたろばに聖人をのせて、きゅうにラヴェルニァの山をくだることになりました。

そのとき、フランシス聖人は、兄弟のマッセオとアンジェロとをよんで、ラヴェルニァの山を守ることをたのみました。そして、自分はもう生きていて、二どとこの山にのぼることのないのを知って、

「さよなら、さよなら、なにもかもさよなら、ラヴェルニァの山よ、天使の山よ、さよなら、わたしにげんきをつけてくれた兄弟(フラテ)のたかよ、さよなら、やさしいお前の心をわたしはわすれない。わたしを悪魔から守ってくれた岩よ、さよなら。この山にたった聖(サンタ)マリアのみ堂よさよなら。」

といって、いつまでも涙がとまりませんでした。

千二百二十四年の九月三十日、聖フランシスは、お弟子のレオネだけをつれて、ふたたびアシジの聖(サンタ)マリア寺へかえって行きました。いよいよラヴェルニァの山がみえなくなるというとき、聖人はろばからおりました。そしてひざまづいていのりながら、すみわたった秋空の上にくっきり高い山の峯に、祝福をおくりました。

お日さまのさんび歌

十

字架の奇蹟(ふしぎ)でうけたフランシス聖人の傷は、黒ぐろと釘あとが、両手両足にのこってただけで、不自由なくあるけるようになりましたが、あついエジプトからもってきた疫病は、からだにふかくくいこんで、聖人の信仰のほかのちからのこらず、うばって行きました。そのなかでも目のちからは、もうまったくの、めくらどうようなくなっていました。

聖人はたっしゃな時から、お日さまと火を、神様のおつくりになったもののなかのいちばんありがたいものだといっていました。神様のおちからのいちばんみごとなあらわれだといっていました。

「朝、お日さまがのぼったとき、わたしたちはまず神様にさんびをささげなければなりません。日がくれて、よるになったとき、わたしたちはまた、火にむかって、神様へかんしゃのことばを申さなければなりません。わたしたちのふたつの目は、もともとめくらなので、ただお日さまと火と、ふたつのきょうだいのおかげで、ものがみえるだけなのです。」

聖人は、こういいいしていました。いよいよ両ほうの目が、このありがたい神様の光をかんじる力がなくなると、聖人は、それをかなしむかわりに、お日さまのさんび歌をつくって、それを、たかい聲でうたいました。うたいながら、よろこびが胸にあふれてくると、

兄弟たちにもいっしょにうたわせました。たのしい、さかんな合唱のなかで、聖人はあらためて、神様にかんしゃのいのりをささげました。

わが兄弟（フラテ）なる太陽をほめたたえる歌

いとたかきもの、いと力あるもの、よき主よ、ほめたたえ、みさかえ、ほまれ、その
　ほかのあらゆるみめぐみは、主のものです。
いとたかきものよ、これもあれも、なにもかも、あなたのものであってよいのです。
それは、どの人間も、御名をよぶだけのあたいのないものでございます。
主よ、どうぞほめたたえさせてください、
あなたはおつくりになりました、すべてのもののために、
そのなかでも、兄弟なる太陽の君は、
ひるの日によって、わたくしどもをあかるくしてくださいます、
それは、すばらしいかがやかしさで、さんらんとうつくしく照りわたります、
あれこそ主よ、あなたのあらわれたおすがたでございます。

きあ主よ、どうぞほめたたえてください、あなたは、月を、星をおつくりになりました、それを、大空にあらわして、あかるく、とうとく、うつくしくなさいました。
主よ、どうぞほめたたえさせてください、兄弟なる風のために、
それから、大氣のために、雲のために、露のために、うつりかわる四季のために、
主はこれらのものを、あなたの生きものの生きて行く力におあたえになりました。
主よ、どうぞほめたたえさせてください、姉妹（しまい）なる水のために、
あれは、まことに萬人のため役立ちながら、つつましく、とうとく、きよらかでございます。
主よ、どうぞほめたたえさせてください、兄弟なる火のために、
火があればこそ、夜もあかるいのでございます、
それは、いかにもうつくしく、たくましく、力づよいものでございます。
主よ、どうぞほめたたえさせてください、わたくしどもの姉妹、わたくしどものともだちなるよき大地のために、
それは、まことにわたくしどもを、ささえみちびくちからでございます。
さまざまうつくしい色の花をさかせ、實をむすばせ、野の草をそだてます。

主よ、どうぞほめたたえさせてください、ゆるすもののために、
そして、からだのやまいと、こころのなやみにたえしのぶもののために、
それらを、心しずかにたえしのぶものに、よきさいわいのありますように。
なぜと申しますに、いとたかきものよ、主によってかれらは、冠をいただくので
ございます。
主はまことにほめたたうべく、祝福と感謝がささげられなければなりません。
そして、あくまでつつましく、へりくだって、ほめたたえ、お仕え申さなければ
なりません。

ラヴェルニアの山をくだったあくる年、千二百二十五年の夏、聖人は、さいしょの女弟子で、宗門の教の總領むすめである聖女クララ尼の住むダミアノ聖堂にいて、病をやしなっていました。太陽の歌は、ある日のよろこびから、こどものうたうようにうたいだしたものでございます。もうこのとき、聖人はまったくのめくらでいて、しかも心の中は、いつもおさなごのように自由でたのしかったのでしょう。

ともしびのきえる日

それから一年あまり、聖人は、いじわるい「死」を、つい氣やすく門ぐちに待たせておいて、やはり、おしえのために、さいごの日まではたらきつづけました。さて、いよいよ、「死」が、門ぐちをこえて、へやの中にはいって來そうになったとき、

主よ、どうぞほめたたえさせてください、姉妹なる肉體の「死」のために、
生きております人間はたれひとり、死をのがれるものはございません。
死の罪にあたった死ぬものだけが、まことに不幸なのでございます。
あなたの聖なるみこころにつきしたがうものは幸福でございます。
それは、二どめの死も、そのものを、つゆいささかそこなうことがないのです。

とうたって、それを太陽の歌のおしまいにくわえて、みんなにもうたわせました。

千二百二十六年十月三日、アシジの郊外ポルチウンキュラの聖御母堂に、夕べのみあか

しのあがるころ、フランシス聖人の肉體と、この世界との縁はきれました。聖人のきよいたましいは天にのぼりました。もう空の色もはっきりみえなくなったたそがれの中で、れい土色のころもの修道僧ににたひばりの大群が、御堂ののきちかくとびまわりながら、主をたたえる歌を合唱しました。

フランシス聖人は、まだ、かぞえ年四十五歳でございました。

聖人の生まれたのは、千百八十二年、中イタリア、ウンブリア州、ペルージアのアシジ僧正領で、毛織物商をいとなむ父親のむすこでした。ゆたかなお金持の家に生まれて、町のたのしい遊びずきなわかもののなかまにとりまかれていたフランシスが、神様と人間につかえるしもべになり、神様からいただいたはだか身ひとつにかえって、お百姓のきるつつましい土色のきものに、縄の帶だけしめて、いつもすあしで土をふんであるき、すべてのまずしいもの、こじきやらい病人のおともだちになったのは、はたちになったばかりの時でした。そのあくる年、千二百八年二月二十四日、聖マタイの禮拜日に、ポルチウンキュラの聖母御堂で、坊さんのふとよみあげたマタイ福音書第十章のことばが、まったく、フランシスが一生の行く道を、はっきりとさししめしました。イェズスは、諸國に出て道をつ

たえる十二人のお弟子たちに、こうさとしました。

往きてのべつたえ、「天國は近づけり」といえ。病めるものをいやし、死にたるものをよみがえらせ、らい病人をきよめ、惡鬼を追いいだせ。價なしに受けたれば、價なしにあたえよ。帶のなかに、金、銀または錢をもつな。旅のふくろも、二枚のしたぎも、くつも、つえももつな。はたらきびとの、その食物をうるはふさわしきなり——。

それからなん年かのち、おなじポルチウンキュラに、法王からゆるされたフランシスコ修道院がたちました。それは小枝に泥をねりあわせてつくったそまつな家でしたが、ベルナルド、ピエトロ、エジジオなどのお弟子たちが、イェズスの十二使徒のようにあつまってきて、第一のフランシス宗團をそこにいとなみました。宗團の僧たちは、たれもちいさい兄弟とよばれて、それはフランシスを族長にあおぐ、ひとつの家族であったのです。

聖人が三十一歳になったとき、アシジの名門のむすめクララが、聖人に歸依して、十七歳の若尼が、キリストに一生をささげることになりました。このクララ尼のクララ女子修道會が、第二のフランシス宗團になりました。この尼たちは、ちいさい姉妹とよばれまし

た。さて、宗團にはいって坊さんにならないでも、フランシスのあとについて來たひとたちのために在家の友のあつまりができて、これが第三の宗團になりました。

西暦の十二十三世紀、中世の闇がこくなって、ローマ教會は、惡魔の巣になりかけていました。フランシス聖人は、いさましい旗じるしやそうぞうしいらっぱの音で、さわぎ立てるかわりに、自分ひとりのからだで、主キリストのおしえをそのとおりしてみせました。イェズスのうけた苦しみとなやみを、そっくり自分のなやみと苦しみにして、いたいたしい十字架の釘あとまでもうけたのでございます。

聖人のつつましい、しかしたしかな、うそいつわりのないキリストのじっせんで、死にかけたおしえが、あたらしい息ぶきを吹きかえしました。

ダンテの「神曲」は、天堂のばらの座に、聖母マリアとむかいあって、フランシス（イタリアふうにはフランチェスコ）聖人をおきました。

あとがき

「聖母の繪像」には、聖母の奇蹟物語と、これにつながるキリスト教、ことにカトリック宗門信仰に根ざす傳説と童話の名だかいものをえらんであつめました。それと、宗門からすこしはなれた民譚ふたつ三つ、その上に、これは詩人創作の幻想をかたちにしてみせたものでありながら、同時に中世の教會と、それをめぐる信者たちの幻想の大きな花園でもあるダンテの「神曲」のあら筋をとりあつめて、再話してみました。

西洋の歴史で、ふつう中世といっているのは、古代の文化世界のほぼなかばを統一して、世界帝國をうちたてた羅馬がおとろえて、東と西のふたつの帝國に分裂し、そのすきまに、いまのヨーロッパ諸國民の先祖にあたるドイツ民族やケルト民族がわり込んで來て、四七六年に西羅馬帝國ますほろび、そのあとにイタリア、イギリス、フランス、ドイツをはじめ、そのほか、北ヨーロッパに、デンマーク、スウェーデンなど、ノルマン人の國ぐにがあとからあとからできた時代です。そして一四五三年さらに、東羅馬の帝國がほろびると、そのあとに、スラブ民族のロシアやポーランドが、とおく中央アジアの沙漠を越えてやってきたマジャール人のホンガリアが、というふうに、新しい國がつづいてできました。それらの國民は、それでも、たいてい、羅馬の大教會の下について、キリスト教の信者になりましたが、べつに、

アラビアの沙漠から出て來て、マホメットの教を守るサラセン人が、アフリカ、トルコ、イスパニアというように、ヨーロッパの西と南に根をはって、キリスト教の國民とはげしくたたかいつづけました。このあいだを時代にすると、西洋紀元の五世紀から十五世紀まで、千年以上にわたり、日本でいうと、聖德太子の頃から、奈良、平安、鎌倉から、室町時代にまでつづく、ながいながい年代にあたります。

さて、こんなにもながいあいだ、ひろいヨーロッパは、八天下というようなありさまで、大きな國をおさめている王様と、その下に小さい領地を分けてもらっている殿様が、數しれずいて、てんでんにお城をかまえ、武器をたくわえ、いい馬とつよい武士をやしなって、領分の百姓を兵隊につかって、王様同士、殿様同士、戰爭をして、土地をひろめることばかりしごとにしていました。それで、いっぱんの人民たちは、學校へも行けず、外國へも出られず、追いつかわれるばかりで、人間としてなんの自由も權利もみとめられず、まあ日曜日にお寺まいりをして、坊さんのお說教をきいて、さんび歌をうたつて、せめて死んで天國に生まれることだけをたのしみにして、生きていました。ひとくちに、封建時代とよばれ、暗黑時代といやな名をつけられているのもしかたのない、まことにきのどくな時代でありました。

そんなわけで、どこの國も、國民のほとんどが無學文盲で、本をよむのは、お寺の坊さんか、貴族のこどもたちにかぎられていて、文化の光のいたってうすいこの中世時代に、しかし口から口へ語りひろめられるお話はかえって榮えました。なぜといって、新聞も本もないこの時代には、人と人とがよりあえば、おたがい、かわった話、めずらしい話をしあってきくのが、なによりのたのしみでしたし、ひろい世の中

のことを知って、たれもすこしでもせまくるしい毎日の生活のくつろぎにしようとおもうのはむりのない人情です。そこで、お寺でも、お城でも、町でも、田舍でも、牧場でも、または市場や宿驛や港のような人のあつまる所では、お話が人間の頭數とおなじにたくさんできて、それが話されるそばから、たんぽぽの穗が風にふかれてとびちるようにゆくえさだめずとびちりながら、それがどこかに種子をおろして芽をふくと、それからまたあたらしいお話の花がさきだしました。それになにしろ、千年の餘もながい間のことです、ひと粒おちたお話の實が、かしはやひのきのような大木にもそだつでしょう。それに、いまのわたしたちのように、小說をよんだり、芝居を見たりするかわりに、中世の人たちは、旅から旅へ、一ちょうの琴をかかえて、わが琵琶法師のように、昔物語をうたいあるく歌うたい、または町や村の廣場に往來の人をあつめる講談師の世間話を、おなじく旅藝人の歌や踊とともにたのしみました。やがて、そういう口でつたわる物語や、みじかい世間話のようなものを、文字にかきあらわして、韻文または散文の物語歌や小說のかたちにする詩人や作者も出てきました。そのなかで、ことにりつぱに、または美しく出來上がったものが、人びとの間にもてはやされ、印刷の技術のまだはつめいされない時代でしたから、羊の皮や板きれや、のちには紙にうつされて、よみひろめられ、さらにうつしかえられたりして、むろん、みんなではなく、ほんのそのうちの何分の一かが今日までつたわりました。それでもその分量はなかなか多くて、いま方方の國ぐにで、童話集や傳說集といっているお話のもとはたいてい、このなかから出ているのです。

ところで、中世のこのおびただしいお話の山のなかから、近代のお話の文學のもとになったものだけをひろいだしても、たいへんなかさになりますが、それをざっとよりわけると、すくなくて七つぐらいの部門には分けられます。

1　**動物ことに狐を主人公にしたいろいろの教訓たとえ話**――ひとくちに狐物語、といってもいいでしょう。このことは、この文庫の「ししの王國」や「ひみつの花園」の「きつねのさいばん」の解説でかきました。

2　**聖者物語**　聖母マリアの奇蹟物語や、教のために身をささげた聖人たちの靈驗物語で、カトリック童話または傳説といっぱんによばれているもの。

3　**騎士物語**　西洋のナイトまたはシヴァリ（騎士）は、わが國の武士にあたりますが、それはまた信心ぶかいキリスト教徒であって、聖母マリアにかわる人間の女性をひとり、この地の上にもとめ、それを守り神のようにおもって、そのひとのために身をささげるつもりで戰場に出ます。アーサァ王の圓卓騎士、シャールマニュ帝の十二勇士はじめ、これはそういう騎士のかなしく清い愛と武功の物語です。

4　**民族の神話と傳説**　羅馬帝國のあとをうけて、近代のヨーロッパ諸國をおこしたドイツ、ケルト、ノルマン、そのほかの民族はいずれも、未開時代から語りつたえた神話と傳説をもっていて、希臘、羅馬の神話傳説とちがった、それぞれの神と英雄の物語のあるなかに、おもしろい童話をもたくさんにたくわえてもつています。

5　**世間話**　いまなら新聞の社會記事のような實話から、旅行談、冒險譚、怪奇談、おどけ話、笑話、

または現代の短篇小説のような筋と組立をもった話と、いろいろあるなかに、のちのペローやグリムの童話のもとになったものもなかなか多いのです。

6　**希臘、羅馬昔話の再話**　ホメーロスの「イーリアス」や「オデュセイア」でつたわったトロイア戰爭の古話をはじめ、アェネアスの羅馬建國の物語、アレクサンダァ大王の東方征伐物語まで、古代の神と英雄の傳説が、いろいろに話しかえ、話しくずされてつたわりました。ギリシァ＝ローマ神話の神様も、山や森や泉のニュンプェ（精女）たちも、キリスト教の世界では、異端邪宗の魔物か妖魔女にされて、それがのちのおとぎばなしの妖精妖女に化けて行きました。

7　**東洋傳來の物語**　中世は、暗黑時代といっても、戰爭や旅行や貿易で、外國との交通はしじゅうあったので、ペルシァ、アラビア、中央アジアから、インド、シナ、日本の話までが、さまざまな路をとおって、西洋へながれこみました。今日の大きくふくれたイソップ物語や、千一夜物語（アラビア夜話）もこの東西交通のあいだに、だんだんのびひろがってできた民話集なのでございます。

十字軍の騎士たちの物語が、騎士道の花であったように、聖母マリアの信仰をめぐる傳説は、おきてきびしいカトリック僧院のがんこな巖のなかに、ひとすじほとばしる清い泉であったでしょう。聖母マリアは天の大后として神の位にありながら、現實にイェズスを生み、イェズスをはぐくんだ人間の母として、地の上につながっていました。人間のかさなる罪業に神のいかりのはげしいほど、神と人とのあいだに立

って、神の心をやわらげながら、どんなおろかな、どんなすくいようのない、人間の悪とあやまちにも、さいげんない慈悲の手をのばしてくださる聖母のあることは、うたがいとおそれの黒闇地獄にうごめいている民衆の胸を、どんなにあかるくげんきづけたでしょう。中世ゴシック美術の粹をつくした大聖母寺をはじめ、町まち村むらのどんなせまい小路にも、聖母堂と聖母像はあって、それは天國を待ちのぞむ民衆のもえる情熱の象徴であったのです。

目にみえないおしえとして説かれてきたキリストの愛が、なにか目にみえるような聖母マリアの「人」をとおして、人びとのあたたかい胸にこころにつたえられることになったのです。ただそれが、いっぱんには、かんぺきな女體をもつ神としておがまれて、ダンテのような理性も感情もなみはずれて高い詩人には、靈のマリアのベアトリチェにもなってあらわれました。のちに、ゲーテが「久遠に女性なるもの」といったのも、聖母マリアのうちに、神にまで高められた女性精神をみたのでございます。

聖母の信仰が、建築に彫刻に繪畫に工藝にかず知れない美術の傑作大作をつくりださせたように、聖母のなかだちによる奇蹟物語も、はてしなく作られ、また、語られ歌われて表ました。

聖母物語の作者には、學問のある坊さんもあり、語りものをもって旅をわたってあるく詩人たちもあったでしょう。ここに三つそういう物語をおさめたうち、「聖母の輕業師」は、近代、フランスのアナトールフランスの小説が、ひろくよまれていますが、ここでは、中世からのふるい形のままで話しました。

「聖女ベアトリチェ」も、やはり、ベルギーのマーテルリンクが、「敎妹ベアトリチェ」という三幕物の

芝居にかいていて、これもフランドル（西ベルギー）の傳説です。「證人に立った聖母」も、やはり、アナトール フランスが、おもしろくかきなおしていますが、これも傳説のままをかきました。

日本にも、平安時代、淨土敎が阿彌陀信仰をさかんにひろめると、「なむまみだ」ととなえる口の中から、ちいさな阿彌陀様のお像のとびだすという話があります。十三世紀、フランスの修道院長であったゴーチエド コアンシのつくった物語にも、似た話があって、（「證人に立った聖母」の話もこの作者のつたえたものです）學問も才氣もないかわり、すなおなな信心で聖母につかえていた坊さんが、聖母の御名のMARIE という五つのかしら文字でさんび歌をつくって、これをうたって聖母にだけきいていただいていましたが、それが神のお心にかなったのでしょうか、この坊さんが死ぬと、口の中から、みずみずしくまっ赤なばらの花が五つ咲きだしました。これは、「聖母の輕業師」にも通じるお話です。そのほか、いつも聖母へのおいのりをわすれなかった死刑囚人がどたん場でたすかったり、信心ぶかい騎士がメサのおいのりにむちゅうになっているあいだ、聖母が身代りになって、試合に勝ってやったというようなお話を、一一あげつくすことはできません。

「オーカッサンとニコレット」「アミスとアミール」、それと「グリゼルダ」の物語は、中世のきびしいおしえと信仰のなかで、人間のしぜんな情意のうごくままに、自由な行動をとろうとする文藝復興期の近世精神へあゆみよろうとするかたむきを先だってみせたものだといわれています。

「オーカッサンとニコレット」は、十三世紀の末フランス語の散文でかかれたものですが、あいだに歌が

はさまっていて、それがちょうどわが浄瑠璃のフシとコトバ、浪花節のフシとカタリのようなかんけいできょうにつながっています。作者は、それをカントファーブル（歌ものがたり）とよんでいます。ながいあいだ、寫本のままパリの國立圖書館に保存されていて、十九世紀の末あたりから、アンドルウ ラングが英譯したり、ウォータァ ペータァが「文藝復興」という本のなかでくわしく話したりして、きゅうに名だかくなりました。そして、ペータァは、このお話のなかでも、少女のニコレットが、夏の月夜に、庭へぬけだして、オーカッサンのとじこめられている塔をたずねて行く一段を、ことに美しいといっています。ぜんたいに、芝居めいた場面と、身振手ぶりで話されているようなところのおおいのは、ただよむためにかかれたものでなく、半分動作で演じてみせた語りものであるからでしょう。異教ふうならアラビア夜話のにおいのするのも、かわったところです。

「アミスとアミール」は、日本の浄瑠璃歌舞伎の身替り話にあるような、こどもの血のぎせいがはさまっていて、すこしやばんなかんじですが、これはふるく、北方からドイツ民族のもって來たものだとペータァはいっています。それでいて、ぜんたいには、「オーカッサン」と同様、やわらかなあまい情緒たっぷりな、南歐ふうの香味をゆたかにたたえています。近親の血で、らい病の毒を洗いだすというかんがえは、しかし日本にもふるくからあるものでした。

グリゼルダの物語も、「アミス」のそれとおなじく、ぜったいめいれいへの服從と忍耐の物語で、それがつまり神の心にしたがうものだという寓意だといわれています。ですから、伯爵が夫人の貞心をためす

のは、舊約のヨブ記の神様が、ヨブの信心をためすのと同様になるのです。

グリゼルダの話をはじめてかいたのは、イタリアのボッカチヨで、れいの十日物語の十日目の第十話、いちばんおしまいの話として出ています。イギリスのチョーサァも、カンタベリ物語の第三日目に、法師の物語でおなじ話を話させています。ボッカチヨと同時代の詩人ペトラルカも、この話を韻文物語にしていて、このほうがじつはさきに出來ていたという説もあります。十六世紀以後ずいぶんはやって、民謡にもうたわれ、「かんにんづよいグリッセル」という散文物語もかかれ、十九世紀になると、エッジワース女史の「新様グリゼルタ」という小説も出ました。シェイクスピアの「じゃじゃ馬馴らし」の芝居にもこの話は引かれています。すべては、ヨブの、「エホバあたえ、エホバとりたまう、神のみ名はほむべきかな」ということばによってつくりもうけたたとえ話であることは、前にもいったとおりでございます。

「まんだらマントの笛ふき男」は、イギリス十九世紀の大詩人ロバァト ブラウニングが、その親友で名優のウィリャム マクレディ（ちいさいむすこウィリーのために戯作した物語歌を、そのままかきやわらげました。ブラウニングの詩はむつかしいという定評のできているなかで、この歌はやさしいことばとこどもらしい調子でかかれていて、この詩人のいちばん親しまれる作になりました。

ハメリン（ハメルン）は、北西ドイツのハノヴァ地方、ハノヴァ市の南にあたる中世いらいのふるい町

で、鼠とり男の話は、一二八四年、旅のふうらい坊に、百三十人のこどもをさらって行かれたという實話らしいいい傳えから、それにそののちおこったじっさいの事件や傳説がむすびつき、まだら服のねずみとりの男が、笛でこどもをつれだした話が完成して、十六世紀末から本になって流布するようになったということです。ドイツでは、國民傳説のひとつになっていて、ゲーテの物語歌はじめ、小説にも芝居にも歌劇にもつくられました。この「ハメリンの笛ふき男」と似た話は、このほか東、西洋ともにあるようです。

「ファウスト博士と悪魔」の話は、ゲーテが種本につかったという通俗民衆文庫の話の大體をとりました。悪魔のためむざんにからだをひきちぎられ、たましいを地獄にもちさられるファウストはまた神をはなれ聖母をはなれ教會をはなれて、魔道におちこんだもののいたましい運命で、中世から近世への世の中のうつりかわりが、そのあいだにみられます。それをもういちど中世にかえして、聖母のじひのすくいで、そして、「久遠に女性なるもの」の力で、むりやり天國に召されることに、ゲーテはつくりかえました。

「ジュリアン聖者ものがたり」の筋は、もっとふるく、十四世紀頃できた「ゲスタ ロマノルム」という物語集のなかの、「運命の子」一名「ゆるすべき罪について」という話で、これが接待聖者とよばれる聖ジュリアンにむすびついて、キリストの奇蹟物語が完成しました。それを、十九世紀に、フランスのフロベールが、「三つの物語」のひとつとして、この作者らしく凝った、美しい、みごとな短篇にしあげたの

フロベールは、それを中世の僧院の窓ガラス繪の聖者一代記からおもいついたといっています。わたくしのこの話は、フロベールをそのままちぢめてかきやわらげたものでございます。

ダンテの「神曲物語」については、そのなりたちから、しくみ、そのほかだいたいのことは、物語のなかで話しておきましたから、その上のくわしいことは、ここではりやくします。ただ、原作について知っておいていいことを、かいつまんでかきそえます。

まず、コメディア——喜劇というのが、ダンテのつけた原題で、これは、地獄の悲劇、淨罪の半悲劇から天堂の光明をあおぐ喜劇におわるといういみで、これにディヴィナ——「神聖」ということばをかぶらせ、神聖喜劇（曲）——神曲となったのは、十六世紀なかばからのことでした。ダンテは、この作のくみ立てを若いときから心にえがきながら、ほんとうに筆をとったのは、晩年の一三〇七年ないし一一年で、一三二一年五十六歳でなくなるまぎわまで、かきつづけていたろうということです。

インフェルノ（地獄界）、プルガトリオ（淨罪界）、パラディソ（天堂界）が、三つに分けて書かれた篇の名で、地獄界だけ序歌とも三十四歌あるほか、あと二界は、おのおの三十三歌づつ、あわせて百の數のカント（歌曲）からできていて、テルツァ リマという三行づつひと組押韻の句が、すべてで一萬四千三百三十三行ある大きな叙事詩のかたちになっているのでございます。すべて、數が深祕のはたらきをもっているなかに三という數が、ことにくふうをこらしてつかわれているのです。

神曲は、ダンテひとりの夢にみた墓のあなたの世界のすばらしい幻想というだけではありません。中世のカトリック教會の大伽藍をそしてそこにあつまったその時代の信心あつい民衆のこらずのもったすばらしい幻想を、三篇の詩篇の中に、昔の細密畫か今の小形映畫のように、ちいさく、こまかくちぢめてもりこんでみせたものでした。ですから、神曲の一萬五千行たらずのことばのなかに、中世千年の世界が、いまでもそのままに、のべひろげられ、生きて動いているのでございます。

さいごに、「フランシス聖人と小鳥」は、聖人の愛弟子レオネの名でつたわる言行錄「完全の鑑」と、作者未詳の、なかば傳說ふうの奇蹟物語「小さき花」とから、ことに美しい話をえらびだして、ほかに聖人の正傳としてまとめられたものによっておぎないました。おおくの宗祖傳がそうであるように、傳說も正傳として語られ、正傳もつまり傳說のほかを出ないので、つまり聖母物語とちがわない奇蹟物語になりました。聖人のじっさいの行蹟がキリストの實踐であったように、傳說もひっきょうかきかえられたイェズス傳でありました。

發行者寄贈

世界おとぎ文庫
(キリスト教傳說篇)
聖母の繪像

昭和二十四年十一月二十五日 印刷
昭和二十四年十一月三十日 初版發行
定價 三〇〇圓
楠山正雄
東京都新宿區四谷舟町六ノ六
小峰廣惠
東京都千代田區飯田町二ノ二〇
第一中外印刷株式會社
東京都新宿區四谷舟町六ノ六
小峰書店
振替東京一九五五四四番
電話淀橋(37)二八五八

本社刊行圖書中落丁亂丁破損本等は
本社へ御申越次第お取替致します

神曲は、ダンテひとりの夢にみた墓のあなたの世界のすばらしい幻想というだけではありません。中世のカトリック教會の大伽藍をそしてそこにあつまったその時代の信心あつい民衆のこらずのもったすばらしい幻想を、三篇の詩篇の中に、昔の細密畫か今の小形映畫のように、ちいさく、こまかくちぢめても、りこんでみせたものでした。ですから、神曲の一萬五千行たらずのことばのなかに、中世千年の世界が、いまでもそのままに、のべひろげられ、生きて動いているのでございます。

さいごに、「フランシス聖人と小鳥」は、聖人の愛弟子レオネの名でつたわる言行錄「完全の鑑」と、作者未詳の、なかば傳說ふうの奇蹟物語「小さき花」とから、ことに美しい話をえらびだして、ほかに聖人の正傳としてまとめられたものによっておぎないました。おおくの宗祖傳がそうであるように、傳說も正傳として語られ、正傳もつまり傳說のほかを出ないので、つまり聖母物語とちがわない奇蹟物語になりました。聖人のじっさいの行蹟がキリストの實踐であったように、傳說もひっきょうかきかえられたイェズス傳でありました。

發行者寄贈

昭和二十四年十一月二十五日　印刷
昭和二十四年十一月三十日　初版發行
定價　三〇〇圓
編著者　楠山正雄
發行者　東京都新宿區四谷舟町六ノ六　小峰廣惠
印刷者　東京都千代田區飯田町二ノ二〇　第一中外印刷株式會社
發行所　東京都新宿區四谷舟町六ノ六　小峰書店
振替東京一九五五四四番
電話淀橋(37)二八五八

本社刊行圖書中落丁亂丁破損本等は
本社へ御申越次第お取替致します

世界おとぎ文庫目録

（※印は既刊）

各巻定價 概算 三〇〇圓 〒二〇円

B6四五〇頁

1 ※第四回配本 アポロンの竪琴 ギリシヤ ローマ神話集

2 オディシウスの大弓 ギリシヤ ローマ傳説集

3 天の浮橋 東洋諸國神話集

4 雲の柱・火の柱 舊約、新約聖書物語

5 ※第三回配本 ししの王國 イソップ及イソップ風喩言

6 のろわれた寶 ゲルマン民族神話傳説集

7 白鳥騎士 アーサア物語 シヤルルマニュ英、獨、佛、西傳説集

8 ※第六回配本 聖母の繪像 中世民譚、聖母奇蹟譚、聖者物語

9 魔法の馬 アラビヤンナイトの物語

10 妖女のおくりもの フランス、南歐童話集

11 ※第二回配本 森の小人 グリム童話名作集

12 大男と一寸法師 イギリス、アイルランド、スコットランド、アメリカ童話集

13 北風のところへ行った少年 北歐、スラヴ童話集

14 ※第一回配本 人魚とお月さま アンデルセン童話名作集

15 次回配本豫定 羅生門の鬼 今昔物語日本古譚集

16 かぐや姫の天上 日本童話

17 お猿の仙人 西遊記支那童話集

18 わらう水 未開民族の動物譚

19 印度、波斯、土耳古、童話集

20 ゆりかごの物語 ゆりかごの歌 こどもにきかせる歌とお話

21 ※第五回配本 ひみつの花園 ゲーテ童話名作集

請求番号

受入番号

○貸出期間は二十日以内

○転貸しないで期間内に御返し下さい

○左の場合は保証金で弁償しなければなりません

(1) 図書を亡失、又は毀損した場合

(2) 督促を受けてから十日以内に返さない場合

国立国会図書館

児19-K-11
1200600486996

小峰書店